

スプロールと田園都市

1. 東京への懸念

東京では今、超高層ビルが都心に集中して建てられている。初めは職場としてのオフィスビルであった。しかし、オフィスビルの供給量が飽和に近くなり、今ではタワーマンションとなった。これは決して、「職住接近」という生活優先の思想によるものではない。なぜなら、いくらタワーマンションであっても、都心に通う通勤者を十分に収容できる住居数を提供することはできない。しかも、単価が高くて普通の勤労者は購入できない。それでも、都市計画に名のもとに行われている。容積率を規制緩和して不動産業者に儲け口をプレゼントする地上げの一種である。

ともかく数的に見れば、職場の都心集中は確実に進行している。そして地方人口が減少、東京の人口の増加が続き、中心部を頂点として人口密度の減少勾配をなすスプロール状の住宅地分布がさらに加重することになる。かつて、独立したコミュニティとして構想された多摩ニュータウンや港北ニュータウンなどが、人口減少に転じて、老朽化マンションの集積地帯になりつつある。

2. ロンドンと東京

産業革命によって都市に人口が集中し、鉄道がそれに拍車をかけた歴史がある。一方、密集した住環境を避けて産業もあり居住環境も優れた独立の町を作るという構想も生まれてきた。

ロンドンの人口は 1851 年から 1900 年にかけて 400 万人から 660 万人になった。地下鉄は 1865 年に開通した。東京では、江戸の人口は 100 万人で、明治末 (1912 年) には 200 万人を超え、昭和 7 年 (1932 年) には近隣の 5 郡 82 町村を大合併して 600 万人近くになった。郊外へ向かう鉄道網も敷設されて、通勤可能エリアが大きく拡大した。東京の地下鉄は昭和 2 年 (1927 年) 浅草ー上野間に開通した¹。

ロンドンの住環境は悪く、人口密集とばい煙のために労働者の平均寿命は短かった。1850 年に生まれたエベネザー・ハワードは、『明日の田園都市』を表して、農業地帯に囲まれた土地に、工場があって雇用機会が保証され、健康な生活と産業を確保できる独立した「田園都市」を構想した。そして同志を得て、1903 年にロンドンから 60 k m 離れたレッチワース駅の周辺に 125 万坪の町と、それを取り囲むグリーンベルト地帯 (農地) 615 万坪の田園都市建設がスタートした。人口は市街地 3 万人、農地 2 千人の計画である。

¹ 猪瀬直樹『土地の神話』小学館、1988 年、pp.183-185

その町は、長らく住民の自治を基本に運営され、資本家の買い占め脅威や第 2 次大戦後の制度変更によって、分解・切り売りの危機に遭遇したが、今日も続いているようである²。レッチワースに続いて、もう一つウェリン・ガーデンシティという田園都市も設立された。長距離通勤の無駄を省き、職場と住居を併せ持つ自足した小宇宙をめざした。ベッドタウンではなく、ニュータウンである。イギリスには、それに先立ってロバート・オウエンのニュー・ラナークという実践があった。さらに、1944 年にはロンドンの市街地の周りを幅 10 マイル (16km) のグリーンベルトで囲み、都市の膨張を制限すると同時に、その外側に 10 個の衛星都市を配置、人口を分散させるという雄大なプランが作られた。

ロバート・オウエンの実践 (1784 年) に類する構想としては、フランスのフーリエが考えた「ファランジェ」がある。これも一通りの機能を備えた共同体を構想したものである。それらの考えを遡ると、思い浮かぶのが、ヨーロッパではあたり前になっている城壁都市である。イタリアでは「コムーヌ」と呼ばれて、その住民は運命共同体として生きてきた。かれらには、巨大な通勤圏を従えたベッドタウンを受け入れることができなくて、一定規模を越えたら分離するという発想が自然に生まれてくるに違いない。

アメリカへ渡った人々にもそれは共通で、戦後 1970 年代のサンフランシスコのウオーターフロント再開発に際しても、ひとつのエリアを総合的な機能を備えた町として計画した実践例が報告されている。そこには用途別の面積計画があり、「住居 26%、店舗とレストラン 7%、コミュニティ機能 15%、ホテル 5%、オフィス 16%、工場 12%、駐車場 19%」といったマスタープランが最初に作られている³。

3. 日本の場合

1960 年代に、美濃部都知事はロンドン大学のロブソン教授を招聘して、東京郊外に独立した完結型の都市を建設しようとした。その結果、多摩ニュータウンなどが構想されたが、結局人々は、中央集権的な政治組織や経済組織に勤めることを望んで長距離通勤のベッドタウンにしかならなかった⁴。これは、その社会に住む人々の意識の問題である。

関東大震災の後、ロンドン郊外のレッチワースをモデルに建設した東急沿線「田園都市」も、戦後は高級ベッドタウンとして私鉄沿線のスプロールの中に埋没してしまった。今後人口減少とともに戦後のニュータウンが過疎地化しつつある。何百年の歴史を持つ由緒ある住宅都市という街並みはわれわれには望めないのだろうか。

(2018 年 6 月 22 日 哲)

² 猪瀬直樹、前掲書、pp.287-326

³ C.アレグザンダー、ほか、難波和彦訳『まちづくりの新しい理論』鹿島出版会、1989 年、p p.51-52

⁴ 「山際が消えた京都と公共空間を私物化する東京」『筒井新聞』第 239 号 (3)

<http://tsutsuinews.html.xdomain.jp/329/329-3.pdf>